

2020 シニアエッセ

2020年3月2日発行 通巻123号

ヒューマンヘルスケアシステム

新時代のケアを見つめる情報マガジン

特集 Feature

先行するドイツから学ぶ介護保険
日本と違う「ホスピス、看取りケア、共同組合型住宅」について

特別号 Special

シニアコミュニティ 2020年特別号1

2020年3月2日発行
発行所・株式会社ヒューマンヘルスケアシステム
http://www.hhcs.co.jp TEL03-5640-2376

定価1100円
(本体価格1000円)

Smile Communication
KINGRUN



エイトリニューアル Eight Renewal

医療・福祉施設専門のオリジナル建築システムより築いた、
今までの業界になかった新しい満足をお届けします。

エイトリニューアルは独自のマニュアル・スタイル・工法をシステム化したリニューアル工事です。
8つの特徴をもち合わせたオリジナル建築システムにより、今までの業界に無かった新しい満足
をお届けします。 外壁塗装・内装塗装・その他あらゆる空間の改修工事をお任せ下さい。

- 1 低コスト
- 2 医療福祉専門の工事業者
- 3 稼働をとめない工事工程
- 4 オリジナル提案書
- 5 トータルプロデュース
- 6 環境配慮
- 7 信頼のスタッフ
- 8 安心保証

施設・病院から一般住宅まで、
幅広く対応致します。



イメージCGパース



現状写真



ご提案イメージCGパース



医療・福祉施設 外壁塗装 施工例



after



戸建・マンション 内装工事 施工例

before

キングラン株式会社
〒101-0041 東京都千代田区神田須田町1-10
キングラン リニューアル株式会社
〒101-0041 東京都千代田区神田須田町1-10

TEL 03-5296-3031 / FAX 03-5296-3336
TEL 03-6324-1328 / FAX 03-5298-1855





巻頭
インタビュー
Okudaira Mikinari

株式会社介護コネクション代表取締役
ミライ塾塾長

ろに起きて朝刊を配り、授業のあとに夕刊を配達、そして集金業務までこなさなければならぬ。「学業との両立はきつい」と聞いていましたから、覚悟を持って沖繩から上京しました。私自身は体力に自信があったので「苦しい」と思ったことはなかった。むしろ、楽しかったですね。しかし、途中で挫折して学校に行けなくなり、借金だけが残った人もたくさんいます。私は一時期出前のバイトで2年間留年したこともあって、6年間続けましたが……。

繋いでから始まる サポート

新聞奨学生の経験が『ミライ塾』に反映されています。「自力進学」にサポートの

必要性を強く感じました。今ある既存の自力進学の奨学金制度というのは、そのほとんどが「仕組み」の提供です。お金を提供するだけ。地方から刺激の多い東京に出て、はじけちゃう子も多い。そして、僕みたい

にバイト三昧で学校をさぼり、留年する学生や眠気に勝てずに学校を休みがちな学生も多い。しかし、誰も止めてはくれないし、引き戻してくれません。

17〜18歳の学生さんに制度だけを提供して、あとは自己責任でというのは難しいのではないかと。私の経験も含めて、自力進学にはサポートが必要だと思い、始めたのがミライ塾です。定期的な会って「ちゃんと学校に行けているか」「単位は取れているか」を確認し、生活が荒れていないかを確認する。そういった「お節介」な役割の人がいないと、気がついた時には「違う方向に行っ

介護人材の不足が問題になって久しいが、ただ先が見えない。何故か。日本の国のカタチにも関わる深刻な問題にも関わらず、あまりにも社会全体が無関心であることに大きな原因があるのではないかと。介護の現場を経験した若い人材が、新しい世界を築きあげてくれるかもしれない。ミライ塾という「チャンネル」に注目したい。

新聞奨学生の 制度をアレンジ

「ミライ塾」は経済的な理由などから大学などへの進学が難しい学生が、自力で進学するための「自立支援プログラム」です。介護業界の人材確保のためと思われるがちですが、そもそもスタートが違います。

私自身、父は国家公務員でしたが4人兄弟を大学に行かせる余裕がないこともあって、兄弟全員が「新聞奨学生」という制度を使って進学しました。新聞奨学生というのは、学費の全額を新聞社が肩代わりする代わりに、在学中に新聞配達業務を行う制度です。学校に通いながら毎日午前3時ご

ていた」ということにもなりかねない。何のために進学したのか分からない、ということにもなりかねない。こういったことを防ぐための取り組みなので、基本の成り立ちが「仕組み」の提供ではなく、サポートが「命」です。学生と施設へ繋いだら終わりではありません。むしろ繋いでから「始まり」なんです。

学費の入口と出口を 支援する仕組み

ミライ塾の仕組みについて簡単に説明しておきます。ミライ塾は基本的には入学前に必要とされる学費の貸し付けを支援するものですが、資金については受け入れ先の介護法人が一時的に支援すると同時に、

未来を担う人材への支援を通して 大きな視点で介護・福祉の将来を考える

並行して日本学生支援機構（JASSO）の奨学金を申し込んでもらいます。法人には給料からの天引きによって2年程度で返済し、そのあとの2年間分の給料はJASSOへの返済分として貯金し、卒業時の返済に充て卒業後の返済負担をできる限り無くすという仕組みです。

現在、大学、短大、専門学校への進学を目ざす学生は全国に70万人超いますが、そのうちの2・5人にひとりには奨学金を使うと言われていきます。しかし、一般的な奨学金制度には「入口」と「出口」、2つの大きな問題があるのです。入口の問題は「入学前に必要となる学費」です。大学は普通、受験して1週間後に合格発表され、その2週間後には入学金と授業料の振込み期限が来ます。AO入試などの推薦であれば、9月に受験して月末にはお金を振り込まなければなりません。奨学金が振り込まれるのは入学後ですから、経済的に余裕のない家庭の学生は「入学金の工面がつかない」ために入学を断念することもある。

もうひとつが「出口」の問題です。借りた奨学金を返せない。月に10万円を借りた場合、22歳で、500万円近くの借金を

背負って社会に出ていく。そもそも、貸与型の奨学金というのは「卒業してから返せばいいですよ」という「ささやき」から始まる。昔からそういう制度なんです。経済が右肩上がりの時代であればそれでも良かった。親もサポートできました。今は違います。大学を出たからと言って、必ずしも安定した就業が約束されていません。親も自分の親の介護などが原因で「疲弊」している。返済が容易ではなくなった時代であるにも関わらず、制度はそのまま。返済できない人が多いのは当たり前かもしれません。

しかし、奨学金を借りている学生にも問題があると思っています。在学中は「お金を借りている」という意識が希薄になりやすい。お金の流れが可視化できていない。「返す」というイメージがない。ミライ塾では卒業までのシミュレーションを作ってお金の流れを可視化していきます。塾生には「借りて、返す」という意識づけをしている。つまり、ミライ塾は入学金という「入口」の部分と、奨学金という「出口」の部分に合わせて支援する仕組みだと言えます。

社会人としての「人間力」を育成する

ミライ塾には「進学支援」という側面と合わせて「人材育成」という側面があります。この人材育成の部分を「塾」と言っている。学校ではなかなか教えられない社会教育を「福祉」を通して行っています。職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎力として、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」そして「チームで働く力」の3つの能力から構成される「社会人基礎力」を、通商産業省が2006年に提唱しました。

この「基礎力」を養うのが、まさしく「介護の仕事」だと思えます。肉体労働でもあり、頭脳労働でもあり、感情労働でもある介護の現場には、社会人としての基礎力を養う要素が「全て詰まっている」と思っております。これは、世の中すべての業種・企業が求めている能力でもあるのです。しかし、世の中に出て初めて自身が思っていた能力と、社会が求める能力との「ズレ」に気づかされることも多い。これは何も若

い学生だけに限った事ではありません。大人になっても仕事を楽しむための視点や想像力が持てなかったり、ストレスコントロールができなくて精神的に悩んだり。そういったことのないように、介護を通して社会人としての「人間力」を身に付け、磨いて行こうというのがミライ塾が目指す本当のテーマです。金銭面など進学するための仕組みだけを提供するのではなく、人を育成し、超高齢社会で活躍できる人材をいろいろな業界へ送り出していくことこそが、ミライ塾が目指している支援のカタチです。

目標に向かって最後までやり抜く力を

人材育成と言っても、ただ単に学力を上げるということではありません。社会で「生き抜く」ためには何が必要かを常に考えながら、そのための「力」を付けさせたい。社会や組織で成果を出せるのは「やり抜く力」を持っている人だと思えます。「グリット」とも言いますが、最後までやり抜くか

PROFILE

奥平幹也

おくだいらみきなり

1974年沖縄県生まれ。早稲田大学人間科学部スポーツ科学科（現スポーツ科学部）卒業。不動産コンサルティング会社において介護施設に特化した投資ファンドを担当。2012年、株式会社介護コネクション設立。2015年に自立支援プログラム「ミライ塾」スタート。以来、人材育成に取り組む。

介護の世界だけに閉じ込めない

日本は間もなく超高齢社会を迎えますが、介護や高齢者を対象とした領域だけではなく、さまざまな専門領域で高齢社会を

今、なぜドイツか。変える勇気と決断を学びたい。

日本の介護保険制度はドイツの制度を参考にして作られたと言われている。

しかし、制度改定の度に介護サービスが縮小し続ける日本をよそに

ドイツは「ベストな着地点」を求めて大胆な改革を進めている。

日本の介護保険制度が始まって20年。果たして“金属疲労”はないだろうか。

これからも時代にフィットした制度であり続けることができるだろうか。

未だに日本の一歩先を走るドイツの介護保険制度から率直に学ぶことから始めてもいいのではないか。

特集

先行するドイツに学ぶ介護保険

日本と違う「ホスピスケア、看取りケア、共同住宅」について

見えた動きを見せている。システム開発会社が介護に関わるシステムを作り、物づくり分野の人たちは介護ロボットを開発し、旅行会社では介護旅行に取り組んでいる。ホテルマンも英語力やホスピタリティだけでなく、介護技術がなければ通用しなくなっています。警察官だって認知症のことを知らなければ対応できない時代です。

今、全ての業界で高度な「専門性」が求められています。そこに介護の専門家としての経験が加わることで、その人の価値はもっと大きくなるのではないかと。つまり、2つの専門性を持つて社会に出ることの意味は計り知れないと思うのです。ひとつの専門性は、やがてAIやロボットに取って代わられるかも知れない。人間の「ずぼさ」は2つ以上の専門性を組み合わせていける力です。ミライ塾では自身の興味のある学校で学ぶ専門性に加えて、高齢者に対する理解、認知症に関わる専門性を身に付けてほしい。そのことが、やがては大きな未来を切り開くことに繋がるのではないかと。若い人を「経験はするが介護の世界だけに閉じ込めない」というのが、ミライ塾の基本的な考え方です。

求められる「支援」という発想

今年、工学部を卒業したある塾生は、学生時代の4年間で介護福祉士の資格を取りました。現在、介護福祉士の資格を持つシステムエンジニアとしてシステム開発会社に就職しました。塾生達は介護施設で働きますが、必ずしも介護職を目ざしているわけではありません。みんな自分が目ざす目標を持っている。役者を目ざしている人。教育者を目ざしている人。それぞれにいろいろな夢がある。

塾生の募集に関しては、主に私が高校を訪問して先生方にミライ塾の仕組みを理解していただくことから始まります。最初は全く相手にされなかった。5年間をかけて実績を積み上げたことで、少しずつ信頼関係ができてきましたが、受け入れる側にも理解されるようになってきました。学費貸付けの負担はありますが、人材確保面でのメリットもあるからだと思えます。それぞれの事情によって働き方は違いますが、塾生は日勤帯での訓練を経て、フル夜勤に週2

日入るといふシフトに移行するケースが最も多く、実質的には週に4日間働いていることとなります。大学生の場合は4年間という短い時間ではありますが、その間しっかりと働いてくれますから、受け入れていく施設には大きなメリットを感じてもらっているのではないかと。しかし、受け入れる際には人手不足を補うという視点ではなく、「支援」という発想がないと難しいと思います。

ミライ塾は2015年にひとりの塾生からスタートしましたが、決して目先の介護人材不足を補う手段として創設したわけではありません。大きな意味で超高齢社会を牽引する人材を育てたかった。介護を経験した学生たちがさまざまな分野で活動することで、画期的なサービスが生まれるかもしれないし、さまざまな業界を巻き込んだイノベーションを起こすかもしれない。そういう人たちの可能性を広げてあげたい。事業性の観点でみると難しい事業ですが、今後は募集人数も増やしていきたいと考えています。